

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

高柳峻秀

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院

【研究題目】

中華民国国民政府期における知日派と日本研究団体

【研究の目的】(400字程度)

近代中国では多数の知日派が日本研究に従事した。特に 1930 年前後から従来の個人主体の日本研究著作に加え、日本事情あるいは日本語を専門に研究する団体(以下、日本研究団体)が相次いで誕生し、その研究成果を定期刊行物や叢書を通じて発表した。また日本研究団体は 1930-1940 年代中国の複雑な政治状況を反映し、国民党・共産党・汪精衛政権とそれぞれ関係を有するものが存在しただけでなく、日本敗戦後においても国共両党から日本研究専門機関の設立が訴えられていた。本研究の目的は、こうした日本研究団体の活動実態とその役割の解明である。日本研究団体は、中国社会に対して日本知識・日本情報を組織的・継続的に提供し続けた存在であり、その日本研究活動や人的関係を検討することは、近代中国における日本の意味を考察する上で不可欠な作業であると筆者は考える。

【研究の内容・方法】(800字程度)

本研究は、上述の研究目的に対する初歩的な考察として 1930 年前後の状況に着目する。具体的には、次の二点の課題を検討する。

第一に、そもそもなぜ 1930 年頃から中国において日本研究団体・日本研究雑誌など組織的な日本研究が登場したのかという課題である。この課題について、先行研究は満洲事変の重要性や、1920 年代後半における中国メディア界の国際問題に対する注目といった要因を指摘している。だが武力衝突や国際問題に対する注目自体はこれ以前の時期にも存在し、またその際に組織的な日本研究が殆ど発展しなかった事実を考慮すると、こうした要因だけでは十分な回答とは言い難い。

第二に、中国の日本研究史上において「上海日本研究社」はどのように位置付けられるのかという課題である。日本研究団体の中で「上海日本研究社」を取り上げる理由として、他の団体と比べて活動時期が早く(満洲事変以前から活動)、雑誌の刊行以外にも多方面にわたる活動を展開し、出版物が多数の読者を獲得しある程度の影響力を有した点が想定される点などが挙げられる。この課題について、先行研究は同社設立には岩井英一など日本の影響があったとしてその「傀儡性」を強調するものや、同社機関誌『日本研究』の内容分析を行いその「抗日性」を強調するものがあり、同社の性質については評価が一致していない。

上述の二点の課題の検討のための具体的な研究方法は次の通りである。まず、1920 年代後半から満洲事変以前における(1)『新生命』の日本研究特集号など国民党関係者による組織的な日本研究、(2)上海中学実験小学など教育機関における日本研究、そして(3)外務省保存記録「支那人ノ日本語及日本事情研究状況調査」など日本側の調査に基づく中国各地の日本研究状況を通して、第一の課題を考察する。次に、(1)上海日本研究社設立の経緯、(2)機関誌『日本研究』の発刊を含めた同社の日本研究・啓蒙活動、そして(3)同社社長の陳彬^{ちんひんわ}蘇(1897-1970)の経歴と役割を明らかにすることで第二の課題を考察する。

【結論・考察】(400字程度)

明らかにした点は次の四点である。第一に、すでに満洲事変以前から中国都市部で日本語学習や日本事情研究が盛んに実施されていたという点である。第二に、日本知識を継続的に発信する場を創出し、抗日でも親日でもない「科学的」「中立的」な日本分析の重要性を主張した上海日本研究社社長の陳彬蘇の役割である。第三に、同社が知識人向けの日本研究活動だけでなく、教材編纂や講演活動、出版物の無料配布などを通じて、児童や一般向けの啓蒙活動も重視した点である。第四に、組織的な活動を可能にした背景として、同社が各界の著名人・要人の支援を受けていた点である。

以上の点から二つの課題について次のように考察する。まず、中国都市部の日本研究熱で高まる日本知識への需要、および各界の要人・著名人による日本研究団体への協力、以上ふたつの要因がすでに満洲事変以前から組織的な日本研究が登場した背景にあると考える。また、上海日本研究社を、中国国内の日本研究熱の中で高まっていた日本知識への需要に対して、各界要人の支援を受けつつ幅広い研究・啓蒙事業を通じて応えようとした先駆的な日本研究団体として位置付ける。